



終末期の肝包虫症根治手術に世界初成功

科学網 news.sciencenet.cn 2016-09-26 21:52:08 科学網

09月13日未明、北京清華長庚医院手術室が、終末期肝包虫症（**宮本注：包虫症はエキノコックスとも呼ばれます**）の根治手術に初めて成功した。

この手術には、**14時間**を要したが、**5グループ**に分けられた**30人**を超す医師が参加、同院の肝胆膵センターが、麻酔科や泌尿器科、心臓外科、映像医学科、集中治療センターなどの内部の専門的多職種チーム（**Multi Disciplinary Team**）と協力、体外肝切除術に成功し、体内肝臓移植と下大静脈の移植再建を行い、世界初の終末期肝包虫症を根治した。

いま、患者は術後の回復も良好で、併発症も出ていない。既に健康を取り戻して退院、休養中だ。

包虫症とは、重篤な人獣共通感染症の一つで、飼い犬などが包虫の主な感染源となっている。病気を招く主な感染ルートは、病気の犬への接触や虫卵に汚染された食物や水を口にするなどである。我が国の包虫症は主に、「分嚢型」と「泡型」及び「嚢胞混合型」の三種類（日本の**HP**等では、「単包条虫型」と「多包条虫型」の二種類とされていますが、この辺まだよく分かりませんので一度調べてみたいと考えています）あるが、その中で「泡型」の包虫症の危害が尤も重く、致死率も高く、『虫によるがん』とも呼ばれている。新疆や青海省、西藏（チベット）、四川省西部などの地域が、我が国における肝包虫の多いところとされている。

患者は、青海省から来た**23歳**の女性で、終末期の複雑な肝包虫症と確定診断されていた。システマチックな映像医学と生化学、肝機能評価により、この患者は広範に包虫症に侵されており、**5つの**腹腔と胸腔臓器及び重要な血管に広がっており、包虫が肝臓の**60%**に広がり、巨大且つ堅く硬化した腫塊を形成しており、さらに下方には右の腎臓及び腎静脈に、上方には広く横隔膜に穴を開け、胸腔と右下肺を侵していることが判明した。包虫症は、腹部最大の静脈血管及びその支流にも広範且つ深く浸食しており、右腎静脈から右心房のレベルにまで達し、**17センチ**長の下大静脈は完全に塞がれていた。また、下半身の血液は圧迫されてでこぼこな側副血行により心臓に流れ込んでおり、肝動脈や門脈、肝静脈、胆管を含め、肝臓に出入りする四組の血管はひどく破壊されていた。

「これは、広範囲に且つ、多臓器に広がった、そして、極めて複雑な病状をもつ症例であり、通常の手術では終末期肝包虫症の切除ができないというものだった。」北京清華長庚医院の執行院長であり、本手術のリーダーでもある董家鴻医師はインタビュー時にこのように語った。

手術の成功には、医療チームが多くの学科の専門家による十分な論証を以て治療解決策が必要であった：体外肝切除に加えた、自己の肝臓と血管移植による多臓器包虫症の根治がそれだった。

12日午前9時、手術に先立ちまず張歆主任率いる麻酔科チームによる戦いの幕が切って落とされ、寿腸に患者の麻酔を行い、バイタル機能のモニタリング機器の設置もされた。

「それに続き、（患者の）体の手術、体外肝臓切除、下大静脈再建と残った肝臓移植**3つの**ステップに分けられて進められた。医療チーム全体が、シームレスに連携し、手術のフルプルーフを確保していた。」董家鴻医師は語る。術中の検査を経て、患者の各血管の吻合もうまくゆき、出血量は**500ml**を下回っていた。手術終了の後、患者は**ICU**に入院し、残りの看護治療が進められた。術後の回復は非常に順調で、合併症も出なかった。

実際、この成功により、この医院医療チームの精鋭技術による患者の治療だけではなく、『精華長庚国際肝胆クラウド医院アライアンス』（以下『クラウド医院アライアンス』）が成立したのだ。

「患者は、青海大学付属医院から転院してきたもので、青海大学付属医院は、**26の**省級医院が加盟している病院の一つなのだ。」董家鴻医師は言う。クラウド医院アライアンスは、内外の優秀な専門家リソースを集めた精華長庚医院肝胆膵センターが、ネットワークツールとデータを共有することで、肝胆専科疾病

の階層別診断や階層別健康管理の体系を打ち立て、各級の肝胆疾病医療リソースの連動を実現せしめ、医師に対しては、理論や技術訓練がステップバイステップで進められ、末端の衛生サービス能力及びその品質を向上させている；患者に対しては、各級医療リソースの障壁が取り払われ、国際リソースが集められて、診療精度やリソースの公平性を実現したといえる。

董家鴻医師は、将来、複雑な肝包虫症の肝胆疾病を含め、時間や地域の隔たりを打ち破り、優秀な医療リソースを共有してより多くの患者がその利益を享受できるようになればよいと希望していると語った。

<http://news.sciencenet.cn/htmlnews/2016/9/357254.shtm>

..... 以下は中国語原文

世界首例根治终末期肝包虫病手术成功完成

科学网 news.sciencenet.cn 2016-09-26 21:52:08 科学网

9月13日凌晨，北京清华长庚医院手术室，一台足以载入终末期肝包虫病治疗史的手术成功完成。

这台手术历时14个小时，参与医生数量高达30多人，共分5个小组，由该院肝胆胰中心联合麻醉科、泌尿外科，心外科，影像科，重症监护中心等专科在内的MDT团队，成功进行世界首例体外肝切除，自体余肝移植联合肝上腔静脉移植重建根治终末期肝包虫病。

目前，患者术后恢复良好，无任何并发症，目前已康复出院休养。

包虫病是一种严重的人畜共患疾病，家犬等是包虫的主要传染源，接触病犬、食入虫卵污染的食物或水是致病的主要途径。我国的包虫病主要分囊型、泡型及囊泡混合型三种，其中泡型包虫病危害最严重、致死率高，甚至被称为“虫癌”。新疆、青海、西藏、四川西部等地是我国肝包虫的高发区。

患者女性23岁，来自青海，被确诊为终末期复杂肝包虫病。经过系统的影像学和生化学和肝功能评估发现，此例肝包虫病侵蚀范围广泛，累及5个腹腔和胸腔脏器以及重要血管，虫病侵蚀了65%的肝脏形成巨大而坚硬肿块，并向下侵蚀右肾及肾静脉，向上侵蚀穿透大面积膈肌，进而侵入胸腔和右下肺。虫病向深部广泛侵犯腹部最大的静脉血管及其分支，造成自右肾静脉至右心房水平，长达17cm的下腔静脉完全闭塞、人体下半身血液被迫经崎岖的侧枝循环绕道回流至心脏，同时出入肝脏的四组脉管包括肝动脉、门静脉、肝静脉和胆管都受到严重破坏。

“这是一例广泛累及多个脏器、病情极其复杂，用常规手术不可能切除的终末期肝包虫病。”北京清华长庚医院执行院长、此例手术主导者董家鸿接受记者采访时表示。

为了确保手术成功，医疗团队经过多学科专家充分论证做出治疗决策：体外肝切除加自体肝脏和血管移植根治多脏器包虫病。

12日上午9点，手术先由该院张欢主任带领的麻醉科团队拉开了大战的序幕，他们快捷顺利完成了病人麻醉并预置了系列生理功能监测设备。

“之后，手术共分为在体手术、体外肝脏切除、下腔静脉重建与自体余肝移植3个阶段完成。整个医疗团队无缝隙地衔接，以确保手术万无一失。”董家鸿说，术中检查，患者各个血管吻合效果完美，整个手术出血量不到500ml。手术完成之后，患者被顺利转入该院ICU进行后续的监护治疗，术后恢复非常顺利，无并发症。

其实，患者成功被救治不仅归功于该院医疗团队的精湛艺术，还得益于“清华长庚国际肝胆云医院联盟”（以下简称云医院联盟）的成立。

“患者就是从青海大学附属医院转诊过来的，而青海大学附属医院正是26家省级医院加盟单位。”董家鸿说，云医院联盟汇集了海内外优质专家资源的清华长庚医院肝胆胰中心，旨在通过互联网工具和数据共享，构建肝胆专科疾病分级诊疗、分级健康管理体系，实现各级肝胆疾病医疗资源的联动，面向医师逐级进行理论、技术培训，提升基层卫生服务的能力和质量；面向患者，打通各级医疗资源，并争取国际资源，实现诊疗的精准性、资源的公平性。

董家鸿期望，未来能够实现包括复杂肝包虫病在内的肝胆疾病，打破时间、地域隔阂，共享优质医疗资源，让更多的患者受益。

20160926C 終末期の肝包虫症根治手術に世界初成功(科学網)